

パナソニック汐留美術館



リニューアル後、最初の「ジョルジュ・ルオー—かたち、色、ハーモニー—」展(2023年)では、塗り替えられた白い壁を活かすとともに、意匠的に段差が設けられた壁の影が出ないように、スポットライトで作品が照らし出された

美術館内「ルオー・ギャラリー」(2023年)



世界で唯一ルオーの名前を冠した展示室「ルオー・ギャラリー」。特許技術の反射板で配光制御された均斉度の高い展示ケース(左)と開閉式でメンテナンスが容易になった特注光天井照明器具



2700~6500Kの調色が可能な高演色LEDで各色調を忠実に再現



直感操作が可能なタブレットシステム

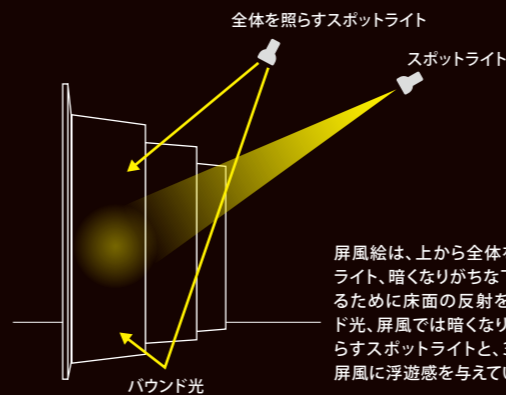


神坂雪佳「杜若図屏風」(大正末~昭和初期:個人蔵)金色の豪華さを出しながら、杜若の印象を薄れさせずにシャープさを立たせ、作品本来の風合いが引き立つような光が用いられた。「つながる琳派スピリット 神坂雪佳」展(2022年)監修:細見美術館



左:渡辺始興「白象図屏風」(江戸中期)と右:中村芳中「白梅小禽図屏風」(江戸後期)では微妙に金色が異なるため、色温度を変えたスポットライトが用いられた(所蔵:細見美術館)

「白象図屏風」を照らす3つの光



屏風絵は、上から全体を照らすスポットライト、暗くなりがちな下側を明るくさせるために床面の反射を利用したバウンド光。屏風では暗くなりがちな中央を照らすスポットライトと、3つの光を用い、屏風に浮遊感を与えている。

美術館・博物館照明の技術と手法の粋を極めた空間

社会貢献事業の一環として開館し、「ルオーを中心とした美術」「建築・住まい」「工芸・デザイン」をテーマに企画展を開催しているパナソニック汐留美術館が2023年4月に20周年を迎えた。これを機に展示室の床・壁や照明設備もリニューアルされた。

当美術館は約100坪という限られた広さを活かして親密感のある空間を創出。企画展にあたっては、毎回、個性的な展示空間をデザインし、新たに展示ケースを製作することもある。とくに照明器具メーカーでもあるので、作品が本来持っている色や質感、マティエールをできるだけ忠実に引き出すために照明器具を選定し、照明手法にも工夫を凝らしている。

一例として、「開館20周年記念展 ジョルジュ・ルオー」では、ルオーが自身の芸術を語る際に繰り返した言葉「かたち、色、ハーモニー」をキーワードに手紙や詩なども含め、代表作を展示。照明計画では、リニューアルした白い壁を活かすため、配光を変えられる特注ウォールウォッシュとスポットライトの光によって生み出される陰影を効果的に利用。各ゾーンはテーマに分けて章立てで空間構成し、異なる照明手法を用いた。また、2022年10月に開催した「つながる琳派スピリット 神坂雪佳」では、作品保存の観点から展示照度が50lxと暗い空間が求められたため、鑑賞者に暗さを感じさせないように、入口から徐々に空間照度を落としていき、暗さに目が慣れた段階で作品が目に入るように計画。琳派を代表する金色と銀色を際立たせるため、色温度が異なる多数のスポットライトを一つの絵画に用いることにより、作品が持つ魅力を引き出した。

当美術館はルオーの作品約260点を収蔵していることも特徴で、所蔵作品を常設展示する「ルオー・ギャラリー」を併設。ここもリニューアルし、展示ケースに特注反射板方式LED照明器具を採用。天井には調光調色が可能な特注光天井照明器具を配置している。

さらに、日本における美術館照明の質向上に尽力すべく、美術館学芸員を対象とした照明研究会も定期的に開催している。



東京都港区東新橋1-5-1
パナソニック東京汐留ビル4階

